

## A Comparison of Slash-and-Burn Agriculture Past and Present in the Foothills of Mt. Hakusan

KOHMOTO Yuko<sup>†</sup>, ISHIMOTO Hina<sup>‡</sup>, SHIMADA Yoshino<sup>§</sup>,  
TAKAHASHI Miu<sup>††</sup>, MIZUNO Mina<sup>‡‡</sup>

### Abstract

This paper summarizes the results of preliminary research and fieldwork conducted for the Field Research Practice 1 ② course at Kanazawa Seiryō University. We gathered information about slash-and-burn agriculture at the foot area of Mt. Hakusan from books and websites, interviewed residents about past and present slash-and-burn agricultural methods, and compared historical and contemporary practices. The slash-and-burn agriculture at the foot area of Mt. Hakusan differs from that in other regions by making of “yakishiro” (piles of timber). In the past, millet, foxtail millet, and radishes were cultivated for self-consumption. Nowadays, millet and foxtail millet are grown primarily for seed preservation and to maintain traditional foods, while radishes are cultivated for home consumption and as a specialty product for sale. Slash-and-burn agriculture was practiced for hundreds of years until before World War II but declined rapidly after the war. Nowadays, no one practices it as a livelihood. While cedar trees have been planted on the former sites, many areas remain neglected. As human living spaces shrink, wildlife populations increase, resulting in problems such as crop damage. Comparing past and present slash-and-burn agriculture, while the methods themselves have not changed, their significance has shifted dramatically. Slash-and-burn, once the primary livelihood method, now retains its cultural value through preservation activities while also serving as part of regional revitalization efforts, altering its purpose. Many aspects remain effective today as methods for utilizing sloping mountainous area, such as cultivating them for several years before fallow and moving to another site and effectively utilizing the effects of burned soil. While continuing past methods exactly as they were is difficult, adapting parts of those past methods to fit current practices could be a way to explore means of effectively utilizing sloping land.

### Keywords

Foot area of Mt. Hakusan, Slash-and-burn agriculture, field work

---

† komoto.yuko.8f@kyoto-u.ac.jp (Graduate school of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

‡ (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryō University)

§ (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryō University)

†† (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryō University)

‡‡ (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryō University)

## 白山麓における焼畑の今昔

河本 裕子<sup>†</sup>, 石本 陽向<sup>‡</sup>, 嶋田美志乃<sup>§</sup>, 高橋 美羽<sup>††</sup>, 水野 未菜<sup>‡‡</sup>

キーワード

白山麓, 焼畑, フィールドワーク

### 1. はじめに

本稿は、2025年度前期のField Research Practice 1 ②授業で行った事前学習とフィールドワーク（2025年7月26日～27日）の結果をまとめたものである。授業の目的は、対象地域の文化を理解し課題を見つけ調べること、フィールドワークで明らかになったことをまとめ、地域の方と共有することである。事前学習として、白山麓における焼畑に関する書籍やウェブサイトで情報を収集した。さらに、1泊2日のフィールドワークを行い、昔の焼畑と現在の焼畑について、地域の方が実践する方法を見学したり聞き取りを行ったりした。また、地域の資料館を訪問し、焼畑をとりまく環境について現在と昔を比較した。聞き取りを行った結果は、ポスターにまとめて地域の資料館で掲示させていただいた。

本稿の内容は下記の通り。

1. はじめに
2. 背景
3. 調査地の概要と調査方法
4. 白山麓の焼畑についての聞き取りの結果  
【桑島での聞き取り：山口氏】  
【中宮での聞き取り：新田氏、畑氏】  
【中宮温泉での聞き取り：西山氏】
5. 白山麓の自然と環境
6. 焼畑の今昔
7. おわりに

### 2. 背景

焼畑は、日本全国の山間地域において戦前まで盛んに行われてきた。国内では八地域、特に焼畑が盛んに行われてきた地域があり、白山麓はそのうちの一つである（佐々木、1972）。戦前まで数百年にわたり焼畑が盛んに行われてきたが、戦後焼畑を行う人は急速に減少した。本稿では、焼畑の定義について、橘(1995)を参考に、「山間地の樹林・草地の植生を伐採・焼却して耕地をつくり、数年間作物栽培を行ったあと農耕をやめ、十数年～数十年の休閑期間において植生・地力を回復させ、再度耕地として利用する循環的な農耕のこと」とする。

白山麓の焼畑には、栽培する主な作物によって「ヒエナギ」、「ナナギ」、「ソバナギ」の3種類の呼び方がある<sup>(1)</sup>、それぞれ、主穀となるヒエをはじめとしてアワ、大豆、小豆を順に栽培するもの、菜っ葉類を栽培するもの、ソバを栽培するものであった（白峰村史 1962, 橘 1995）。

白山麓で主穀のヒエを1年目に栽培する焼畑（ヒエナギ）は、前年の秋に樹木を伐採・乾燥させ、夏に火入れを行い灰を肥料に作物を育てる方法である。焼畑では、無施肥・無農薬で作物を栽培し、その後十数年～数十年の休耕期間を経て、再び焼畑として利用する循環的な農耕システムである（橘、1995）。

白山麓では1年を通して居住する「永住出作り」、夏季（5月上旬から11月中旬）のあいだ居住する「季節出作り」と呼ばれる小屋がある。どちらの形態の出作りでも山中で生活しながら

焼畑を行い、自給用のヒエやアワ、大豆などを栽培しながら江戸時代以降盛んに養蚕を行うようになった(橘, 1995)。

白山麓の焼畑は一時途絶えたが復活し、現在は数人が焼畑を継続している。焼畑を生業として行う人はおらず、地域文化の継承、地域資源の利活用を目的に、地域住民や焼畑に関心をもつ学生などが参加して続いている。

### 3. 調査地の概要と調査方法

現在の白山市は、2005年(平成17年)に1市2町5村(松任市、美川町、鶴来町、河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村)の合併により誕生した。白山麓は、自然地理的には石川県・富山県・岐阜県の県境にまたがる白山の麓の範囲を指すが、「白山麓」を冠する書籍などでは特に石川県側の手取川上流域のことを指すため、本稿でもこの地域のことを白山麓とする。この定義によると、白山麓とよばれる地域は河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村の範囲である(図1、対象地地図の南半分の地域)。白山市は石川県の最南部に位置しており、総面積は754.92km<sup>2</sup>、林野面積は73.5%である。調査対象地は積雪3~5mの豪雪地帯であり、平地が少なく水田はほとんどない。年降水量は、2901.4mm、年平均気温は13.0℃である(気象庁, 1991年~2020年の平年値)。人口は112,218人である(白山市, 住民基本台帳・令和7年7月末現在)。

本稿は、以下の方々を対象に、半構造化インタビューの形をとって聞き取りを行った結果をまとめたものである。旧白峰村・桑島地区(以下、桑島)で焼畑を継続して行っている山口氏(70代男性)の焼畑(ナナギ)準備の様子を見学し、聞き取りを行った。続いて、旧吉野谷村・中宮地区(以下、中宮)で、かつて両親が焼畑を行っていたのを手伝っていた新田氏(80代女性)、焼畑について自身に経験はないが焼畑を見たことのある畑氏(70代男性)から当時の焼畑の様

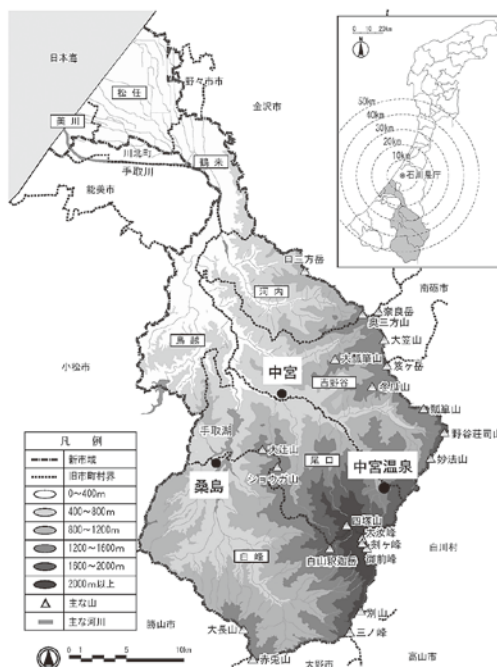


図1 調査対象地(丸箇所)  
白山市ホームページの地図に加筆

子を伺った。そして、旧尾口村・中宮温泉地区(以下、中宮温泉)で子どもの頃に焼畑を行っていた西山氏(80代男性)からかつて焼畑を行っていた場所について教えていただいた。最後に、中宮温泉にある白山自然保護センター中宮展示館で展示を見学し、職員の方に、白山麓の自然や動物についてお話を伺った。

### 4. 白山麓の焼畑についての聞き取りの結果

#### 【桑島での聞き取り：山口氏】

桑島で焼畑を行っている山口氏の火入れ準備を見学した。山口氏は、橘(1995)や白峰村史(1962)に記載されてあるように、代々行われてきた方法を継承する形で焼畑を行っている。樹木を伐採・乾燥させ、乾燥した木を写真1のようなかたまり(焼き代)をつくって火入れを行う。鎮火後、くわで土壤表面を打ち、作物の種を蒔く。雪が降るまでに収穫を行い、来年のための種を保存する。



写真1 「焼き代」(左が斜面上部)  
撮影：水野未菜(2025年7月26日)

フィールドワーク当日に火入れを行う予定だったが、晴天で猛暑日が続き土が乾燥しすぎているため、作物の発芽に支障をもたらす可能性があること、山火事の危険性があることから、火入れを中止した。山口氏は30年ほど前から焼畑を実施しているが、このような理由での中止は開始以降初めてのことだった。

例年通りであれば、樹木を伐採し乾燥させておき、ヒエナギの場合は6月頃、ナナギの場合は7月下旬から8月上旬頃に火入れを行う。火入れに一番よいタイミングは晴れが3日ほど続いた後、火入れ後に雨が降りそうな天候の場合である。本来の焼畑は、毎日天気を確認しながら火入れの日を決める。

「焼き代」は、伐採して乾燥させた木を積み重ねたものだが、燃えやすいように細い木や太い木を工夫しておいてある。焼き代ひとつだけで全体を焼くことはできないので、斜面に平行に1.8m～2mくらいの間隔をあけていくつか縞をつくる。10m程度の斜面だと、3～5段の焼き代を作るそうだ。斜面最上段には、燃えやすいミズキやクロモジの他にススキなどの細かい枝を使い、二段目以降は、強まった火力をコントロールしやすいようにしている。木が燃え残らないように、太い木と細い木を、樹種による燃えさすさも考慮に入れて配置することで、山火事にならないようにしている。

最上段に火をつけ、燃えると「いぶり」を使

用して、灰を下ろして二段目に火をつけ、順次下方まで焼いていく(写真2<sup>(2)</sup>)。「いぶり」とは、燃えた木や灰を下に下ろす道具で、長さは3m程度、柄の部分はリョウブやコシアブラ等の細めで曲がった木を使用し、先端は燃えにくいクリの木で作られている。写真2の中央に映っている長い棒のようなもののことである。焼畑を行う1週間ほど前からいぶりを水につけておくことで、いぶりに火が燃え移ることを防いでいる。



写真2 いぶりで焼き下ろす  
撮影：河本裕子(2025年8月18日)

焼入れ後、土壤表面の温度が下がったら鍬で軽く土を打って、石や木の根を取り除き、大根の種をまく。白山麓では夕立が頻繁にあり、水に恵まれているため、約3日で発芽し、3ヶ月間かけて成長するとのことだった。また、急傾斜の場所では曲がった大根ができる。収穫間近の頃に猿や猪が現れ、作物が食べられてしまうため、種を蒔いた後、畑の周囲に柵を設置するといった工夫を行っている。

#### 【中宮での聞き取り：新田氏，畑氏】

中宮で行われていた焼畑は、桑島の焼畑とほぼ同じ形で行われていた。中宮で山を使う主な目的は、焼畑ではなく炭焼きだった。炭を焼くために木を伐採し、その跡地で焼畑を行っていた。斜面は土の養分が少ないため残った雑木な

どを焼いて灰を養分として作物を育てていた。栽培する作物は、雑穀（ヒエ、アワ、キビ）や豆類、大根などの菜っ葉類、ソバを栽培して一年の糧にしていた。特にソバは、土壌肥沃度が低い土地でも育てられるため、他の作物を栽培した後に植えられることが多かった。

新田氏が子どもの頃は、両親が焼畑を行っていた。山の斜面は肥料が少ないから5年くらいしか同じ場所を使わなかった。新田氏はまだ小さかったので、親のやることを見て棒で炭をおろしたりしたのだそうだ。午前中に山を下りて学校に行き、お昼に学校が終わったら出作りに戻って午後は両親の作業を手伝うのが日常だった。出作りの中ではいろいろで火を焚いていて、蛇が上から落ちてきたりしてびっくりしたこともあった。

昔焼畑を行っていた時は、ヒエ・アワを狙って鳥がたくさん来たり、ウサギも豆を食べたりした。そして、焼畑の作物を狙う野生動物は、同時に山に住む人々のたんぱく源になった。昔は渡り鳥が多かったが、今は昔ほど鳥は来なくなってしまった。

畑氏が保管している中宮の出作りの写真を見せていただいた。中宮の季節出作りは、縄文時代の竪穴式住居のような簡素なつくりをしていたものから、立派なものまであった。屋根は茅やスキで葺いたそうだ。

中宮は季節出作りが多く、焼畑を行う時だけ山中に居住する人が多かったのに対し、白峰から移住してきた人は永久出作りを選択する人が多かった。昭和20年頃の中宮は110世帯ほどあって、そのうちの半分くらいは炭を焼いたり山に入ったりしていた。昭和20年代後半から国策で杉の植林が行われた。焼畑の跡地にはほとんどが杉が植えられているため、現在杉が植えられているところは、かつて炭焼きや焼畑を行っていた場所だとわかる。

焼畑は環境破壊と言われることもあるが、そうではない。アフリカや東南アジアでも焼畑は

行っているが、焼畑を行った後は、山が回復するまで放置してまた焼畑を行う循環的な方法と畑氏は語った。

#### 【中宮温泉での聞き取り：西山氏】

両親が経営する中宮温泉旅館の裏山で焼畑（ナナギ）を行い、大根を作って旅館の料理として出していた。昔、焼畑を行っていた場所は地図に残っておらず、出作りの場所が資料として残っているのみである（幸田清喜, 1956）。西山氏の記憶によると、焼畑を行っていた場所は、図2の通りである。写真3の丸で囲った場所のような、なだらかな傾斜の場所で焼畑を行っており、急な斜面は使わなかった。焼畑を盛んに行っていた時代は、冬の間、山中の出作りを出て、中宮の集落に滞在した。焼畑を行う間だけ季節出作りにおいて、炭焼きや焼畑を行っていたそうだ。

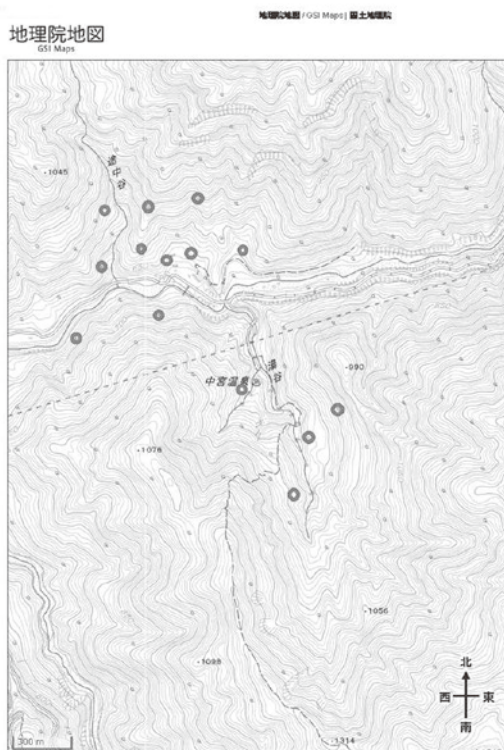


図2 中宮温泉周辺の焼畑用地  
(丸箇所, 西山氏への聞き取りによる)  
地理院地図に加筆



写真3 中宮温泉地区の焼畑跡地の現在  
(丸で囲った部分が焼畑跡地)  
撮影：高橋美羽（2025年7月27日）

## 5. 白山麓の自然と環境

石川県を含め、全国的に野生動物の被害増加の報告が相次いでいる。環境省の個体数推定資料（環境省自然環境局，2024）によると、個体数推定値は調査が行われ始めた1989年以降増加傾向にあり、近年は2000年頃の水準を基準として大幅な増加はない。しかし、農林水産省資料（農林水産省，2023）によると、農地への野生鳥獣被害の原因は、人が被害と見えない「エサ」があることや正しく守れていないこと、周囲に隠れる場所があること、正しく追い払えていないこと、被害軽減のための捕獲が足りていないことが挙げられている。

白山麓においても、石川県自然保護センター中宮展示館に展示されているとおり、豪雪地帯だが、野生動物が数多く生息している。かつて山中の出作りで焼畑を盛んに行っていた頃は、焼畑で栽培する作物はクマヤイノシシ、カモシカ・ニホンジカ、野ウサギなど野生動物の食料でもあったが、猟師がたくさんおり、それらの野生動物は同時に人々の貴重なたんぱく源で、皮などは生活に欠かせないものだった。現在で

は、一部ジビエとして飲食店で提供されているとはいえ、人々が野生動物を食料とする機会は減り、近年見られるようになったサルと合わせて畑を荒らす害獣となっている。

桑島で焼畑を行う山口氏への聞き取りでは、イノシシによるアワ、ヒエの被害がある。斜面上部から自らの体よりも背の高いヒエやアワを踏み倒し、倒れたものを下から食べる。子連れの親イノシシも多く、団体で来て大きな被害となることもある。青虫や野ウサギは主に大根の葉を食べ、スズメなどの鳥は穀物を上から狙う。シカは、トチの実や彼岸花、トリカブト<sup>(3)</sup>、枯れ葉など、食料がなくなってくるとさまざまなものを食べる。フィールドワーク中に、ニホンジカの角の表皮が剥がれてきたのを取るために、こすりつけたと思われる損傷のある木も見られた（写真4）。人が栽培する作物は野生動物にとっても食料となるため、作物は常に狙われている。過疎化が進む当地域では、効率的に野生動物を追い払うのも難しい状況にある。現在、野生動物による食害で大きな問題となっているサルは、過去にはほとんど問題となっていなかった。近年は、収穫間近になる頃を狙い、大根の上部を食べることが多い。甘みがある部分を少しずつ齧るため、多くの大根が被害を受けている。



写真4 鹿の角とぎによる損傷  
撮影：嶋田美志乃（2025年7月26日）

山中の出作り周辺で大規模に焼畑を行っていた頃にも、野生動物による栽培作物の食害はあったが、畑の周囲に柵を設けなければならないほどではなかった。戦後、焼畑を行う者がいなくなり、山中に人が居住することがなくなったことで、野生動物の数が増加している。

## 6. 焼畑の今昔

白山麓では広範囲で出作り周辺の斜面を利用した焼畑を行っていた。山の山頂や尾根沿いは樹木を残し、焼畑用地として利用することもなかった。(橘, 1995)。桑島で焼畑を行っている山口氏も山の尾根は焼畑用地にはせず、中腹を選んで焼畑を行っている。傾斜が30度を超える場所では作業が困難なため焼畑には適さなかったという。現在東南アジアの赤道近くで焼畑を営んでいる国々のように、山の中腹を順番に使いパッチ状になっている景観が、戦前までの日本にも広がっていたのだろう。

戦後、国の拡大造林の施策により、焼畑を行っていた場所は、杉の植林が広範囲で行われた。白山市の森林統計によると、市内の森林面積は約10万ヘクタールにのぼり、人工林のうちの7割がスギである(2022年[令和4年]石川県統計書)。戦後の拡大造林政策の時期には、焼畑跡にスギが植えられることが多かった。戦争で木材需要が高まったことに加え、当時スギは材として利用価値が高く、さらに植林には政府から助成金が支給されたことから、多くの住民が積極的に焼畑跡にスギを植えたという。焼畑を生業としなくなった後、広い範囲にわたり、焼畑跡地が杉林に転換された。現在の景観は、こういった時代背景から生み出された。かつての焼畑跡地は現在、成熟したスギ林となっている。

かつて焼畑を行っていた場所を特定しようとすると、杉林の場所が一つの目安となる。写真3は、西山氏から焼畑を行っていたと伺った場所である。何も聞かずにこの景観を見る

と、過去に焼畑を行っていた場所であると特定することはできない。話を聞いてはじめてそれと分かる。焼畑を行わなくなると雑木林に戻るため、杉林である以外に、目視で焼畑の痕跡を目で判別することはできない。写真3を改めて見ると、写真奥に見える急峻な地形とは異なり、傾斜がなだらかであることがわかる。焼畑用地として利用していた履歴があるからこそ大木はないものの、だからといって焼畑を行っていたという証拠にはならない。

白山麓の焼畑跡地は今日ではその多くが森林に覆われ、当時の面影を想像することは難しい。しかし、植生やかつて焼畑を行っていた方の証言、古い写真、そして現地の撮影記録を重ね合わせることで、その変化をたどることができる。焼畑は行わなくなった現在では「過去の農法」であるが、現在の森林景観や土地利用の履歴を理解するための手がかりとなっている。

## 7. おわりに

白山麓で戦前まで盛んだった焼畑は激減した後、数十年が経過した。現在焼畑を行う人は数少なく、高齢化が進んでいる。本研究で対象とした白山麓の場合、続けている方の焼畑を見学したり、移築された出作りや出作りでの暮らしを見たり、焼畑を行っていた方の話を聞くなどしたりして当時の様子を知ることができる。

昭和30年代後半に焼畑跡地に植林されたスギは現在で60年程度経過しており、伐採適期を迎えている。国産材の価格低迷によりそのままの状態でおかれている場所も多いが、徐々に伐採される場所もでてきている。伐採後は別の樹種が植林されているため、この景観は今後変化していくことが予想される。

資料館の展示や地域住民の方への聞き取りにより、何気なく見る風景にどんな歴史があり、どんな暮らしがあったのかを知る機会となった。また、住民の方への聞き取りにより、現在の状況や問題を知ることができた。

山中で暮らしていた頃のさまざまな知恵は、自然資源管理の面で今も重要な示唆を与えてくれる。数百年にわたって続いたということは、少なくともその間持続的に森林を使ってきたということであり、どの場所を伐採して炭焼きや焼畑を行うかの判断が適切にできていたことを意味している。炭焼き、焼畑、狩猟の組み合わせにより、人と自然のバランスが保たれてきた。焼畑は環境破壊的な方法ではない。日本国内だけでなく東南アジアの焼畑研究でも指摘されているように、適切な休閑期間を設けることで、土壌中の養分が回復し、また農地として利用することができる（古谷2001, 田中2011, 鈴木2022）。

現在全国で焼畑が復活する動きがある。かつて生業として行っていた焼畑は、現在では伝統文化の継承やブランド作物の栽培、地域おこし・観光誘致の一つの方法、環境の再生を目的としたもの、林業の準備（地拵え）として、学術研究といった形で行われ、様々な形で続けられている（鈴木、2022）。

本授業で対象とした白山麓の地域では、伝統文化の継承といった側面や、焼畑で栽培した大根の味のよさから続けられてきたが、外部者が入ることにより、地域おこしや観光といった側面も生じてきている。焼畑について調べたり、

経験者に話を伺うと、単に昔の方法、伝統文化だから継承するという以上のメリット、例えば、傾斜地を有効に使う知恵や自然環境の適切な利用、野生動物との関わりする方法を知ることなどがある。昔の傾斜地の利用方法と現在の森林管理の方法を比較し融合することで、今の気候や生活スタイルに適応した利用方法を模索することができるのではないだろうか。

今回聞き取りを行った内容は、ポスターにまとめ、白山自然保護センター中宮展示館に掲示していただいた。地域の方や、中宮展示館を訪れた方がこの地域の焼畑文化や自然環境について再考する機会になれば幸いである。

#### 【謝辞】

現地フィールドワークを実施するにあたり、元白山ろく民俗資料館館長・山口一男氏、中宮集落「深山料理 けがさ」店主・畑正人氏、新中宮温泉センター職員・新田幸子氏、白山自然保護センター技師・岩本氏、中宮展示館職員・按田氏、中宮温泉にしやま旅館会長・西山喜一氏、おじさまぼっこのメンバーにお世話になりました。金沢星稜大学人文学部准教授・坂井紀公子先生にもフィールドワークの際に同行いただき、多くのご助言をいただきました。ありがとうございました。

## 注

- (1) 焼畑の呼称については、集落や栽培作物によって若干の違いがある。例えば、白峰で「ヒエナギ」と呼んでいる焼畑のことを「ナギハタ」や「ナギ」、「アラハタ」などと呼ぶこともある。全国で行われていた焼畑は、各地で様々な呼称があり、福岡県では「ヤマ」と呼ぶこともあった。
- (2) 授業フィールドワークの日に火入れができなかったため、後日（2025年8月18日）の火入れの日に河本が現地へ行き、焼畑に参加した。写真2はこの時のものである。
- (3) トリカブトには毒性があることがよく知られており、野生動物の食料にはならないと考えられている。しかし、滋賀県の伊吹山のイブキトリカブトの群生地ではシカの食痕が確認されているなど、種類によってはシカの食料となっている。同様の事例が白山麓地域でも確認されている。

## 参考文献

幸田清喜.(1956). 白峯の作り. 現代地理学講座 第二巻 山地の地理. 河出書房.  
佐々木高明.(1972). 日本の焼畑 その地域的比較研究. 古今書院.

白峰村史編集委員会編.(1962). 白峰村史上巻. 白峰村役場.  
鈴木玲治, 大石高典, 増田和也, 辻本侑生.(2022). 焼畑が地域を豊かにする 火入れからはじまる地

域づくり. 実生社.

橘礼吉. (1995). *白山麓の焼畑農耕*. 白水社.

農林水産省. (2023). *野生鳥獣被害防止マニュアル (総合対策編)*.

田中壮太. (2011). 養分動態から見た焼畑の地域比較論. 原田信男, 鞍田崇編著. *地球研ライブラリー*

17 焼畑の環境学—いま焼畑とは. 思文閣出版.  
古谷良, 米田令仁, 二宮生夫. (2001). 焼畑における物質循環—焼畑初年度における炭素, 窒素, カリウムの変化—. 愛媛大学農学部演習林報告第39号. 愛媛大学農学部附属演習林.

## 参考資料

石川県 総務部 デジタル推進監室 県庁デジタル推進課 統計情報室. (2022). *石川県統計書2022年 [令和4年]*. いしかわ統計指標ランド. <https://toukei.pref.ishikawa.lg.jp/library/2022.html#10> (最終アクセス 2025年9月29日)

環境省自然環境局. (2024) 全国のニホンジカ及びイノシシ個体数推定の結果について. <chrome-extension://efaidnbmninnibpcapjcgkclefindmkaj/https://www.env.go.jp/content/000219778.pdf> (最終アクセス2025年9月11日).

国土交通省気象庁 白山河内(石川県) 平年値(年・月ごとの値) [\[data.jma.go.jp/stats/etrn/view/nml\\\_amd\\\_ym.php?prec\\\_no=56&block\\\_no=0973&year=&month=&day=&view=\]\(https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/nml\_amd\_ym.php?prec\_no=56&block\_no=0973&year=&month=&day=&view=\)  
国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティングユニット, 国連大学メディアセンター. \(2013\). 焼畑: 伝統の灯火を守る. <https://www.youtube.com/watch?v=NICz9oTO6rU>  
白山市 \[chrome-extension://efaidnbmninnibpcapjcgkclefindmkaj/https://www.city.hakusan.lg.jp/\\\_res/projects/default\\\_project/\\\_page\\\_001/003/519/itihp.pdf\]\(chrome-extension://efaidnbmninnibpcapjcgkclefindmkaj/https://www.city.hakusan.lg.jp/\_res/projects/default\_project/\_page\_001/003/519/itihp.pdf\) \(最終アクセス 2025年9月25日\)](https://www.</a></p></div><div data-bbox=)

